

「むかしあそび」「自然体験」と保育・小学校の連携

木村 幸泰¹

要旨

理科では、「原体験の不足」という言葉がよく話題になる。確かに、幼少期の体験は、小・中以降の学習の理解を促す大きな役割をもっている。特に、保育における遊びや体験は、科学に関する概念の形成や深い学びの重要な要素になる。その意味で、教育現場で科学を内包する遊びの場をどのようにつくるかは大きな命題でもある。そこで、本稿では、科学を内包する「むかしあそび」「自然体験」の有効性と保育と小学校の効果的な連携の在り方について述べた。

キーワード 原体験 生活科 理科 むかしあそび 自然体験 保育と小学校の連携

1. 緒言

小学校の新学習指導要領が完全実施された。キーワードとして「見方・考え方を働かせて」という文言がある。しかし、見方・考え方は、一学年の一実践で作られるのではない。保育も含めた生活体験や学習によって醸成されるものである。その中で、中学校も含めた学校教育においては、幼児期の体験不足が問題になっている。事実、社会の変化や地域の生活環境の変化のため、外で遊んだり、自分で遊び道具を作ったりする経験や機会が少なくなっている。これは、学習指導要領のもう一つのキーワード「深い学び」を身につけさせるためにも大きな障害となっている

ところで、保育においては、遊びを中心とした豊かな体験の中で、心と体、好奇心を育むことが大切とされている。これらは、小学校の生活科につながり、それ以降の学びの基盤となる。その意味で、保育園や幼稚園、学校の教育活動の連携は重要である。

そこで、本稿では、科学に繋がる「むかしあそび」や「自然体験」の有効性と、保育と小学校の連携の在り方について述べていきたい。

2. 研究の内容

2.1. 生活科の保育との連携の在り方

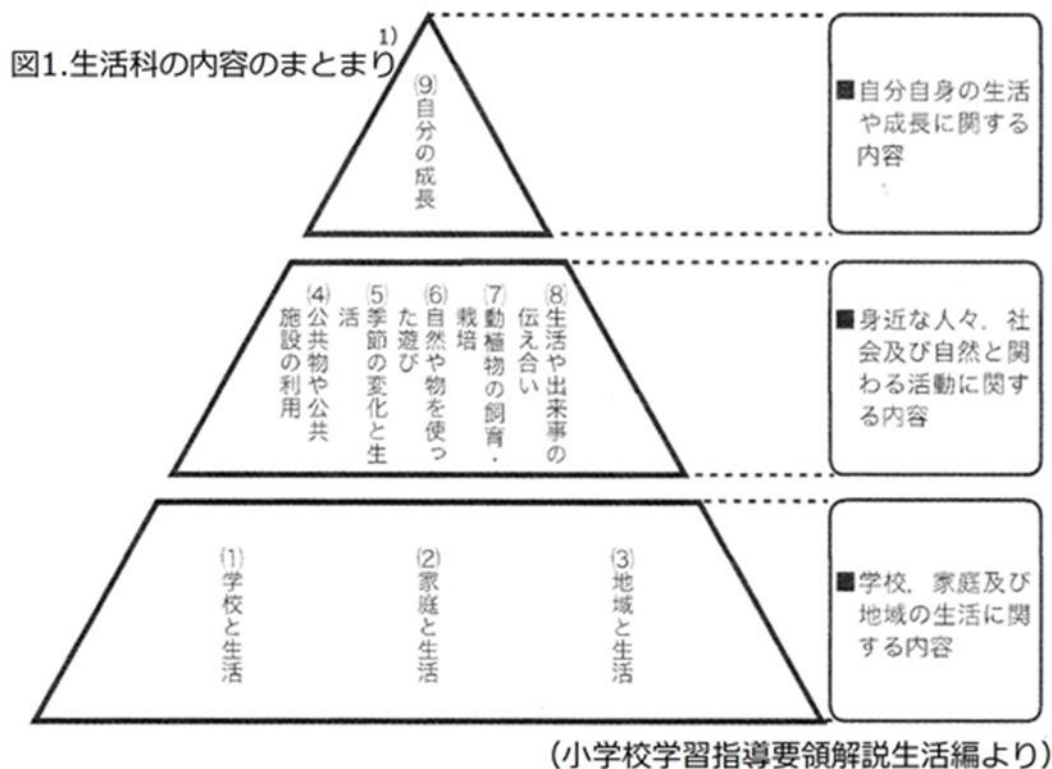
保育の生活や遊びと理科の架け橋となり得る教科には、生活科がある。ところで、学習指導要領では、生活科の学習を図 1. のように、「学校と生活」「家庭と生活」などの9つに分け、「内容のまとめ」として示している。(参：図 1)

この中で、理科に繋がる生活科の授業として多く取り上げられるのは、(5)～(8)の内容である。その中で、現場での実践事例が多く、教材が充実している(7)「動植物の飼育・栽培」については、ほとんどの学校の生活科で取り上げられている。

一方、「(5) 季節の変化と生活」「(6) 自然や物を使った遊び」は、教材や学習活動

¹ 桜花学園大学保育学部非常勤講師

の工夫によって学習の成果が大きく変わる。その意味で、地域の自然や文化を取り入れたり、保育との連携で学習の場を広げたりしながら教材開発を進めることには意義がある。



2.2. 保育の内容と理科の原体験

では、「むかしあそび」「自然体験」には、どのような科学に繋がる原体験が内包されているのだろうか。保育実習を終えた学生に「どんな遊びが、どのように科学・概念に繋がるか」を聞いた。あくまで参考ではあるが、現場教師の考えが見えてくる。

(参考：保育実習を終えた学生 52 名による)

遊び	科学・概念	遊び	科学・概念
コマ	回転運動・エネルギー	けん玉	慣性
折り紙	図形・数学	笛（草笛など）	音
お手玉	自由落下運動	糸電話	音・振動
たこあげ	力・風	あやとり	図形
シャボン玉	空気	竹トンボ	回転運動・空気

まず、「むかしあそび」について考えてみる。例えば、地域との交流会などでよく登場する「ゴムでっぼう」の体験は、小学校の「風・ゴムの学習」に、そして「弾性」へと繋がる。同様に、「シャボン玉」は「空気」に、「笛」は「音・振動」の学習の原体験となる。さらに、「自然体験」の中で行われる「ドングリごま」や「草笛」は、「植物」「環境」の学びの大切な原体験となる。

このように、「むかしあそび」「自然体験」の中は、科学に繋がる原体験の要素が多く

潜んでいる。これらを保育～小学校の生活科・理科へと繋げていくことは、学びを深めるために、重要な役割を果たしていくと考える。

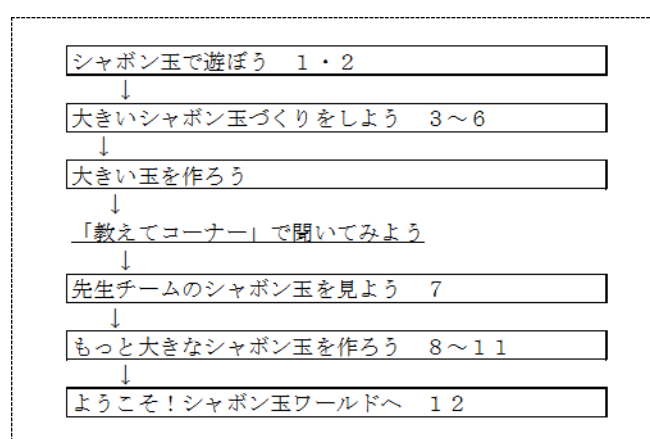
2.3. 幼保（保育）と小中の連携をとり入れた実践から

ここからは、保育と小学校の連携もとに学習の成果を高める手立てを2つの実践をもとに考えていきたい。

<実践1>：単元の振り返りに、幼稚園との交流の場を設定した授業

小1生活科「大きなシャボン玉をつくろう」（研究主題：問題解決に喜びを感じる児童の育成）

本単元では、生活科の終末の振り返りとして、隣接するE幼稚園の協力を仰ぎながら



「むかしあそび」をとり入れた授業を試行した。具体的には右のような単元を考えた。

単元の導入では、いろいろなシャボン玉づくりの自由試行をさせた。「たくさんのシャボン玉」「つながったシャボン玉」などを目を輝かせてつくる様子が見られた。その中で、特大のシャボン玉をつくったA子にみんなの目が集まった。ゆっくりストローを吹

き、そっとストローから離してできる大きなシャボン玉に興味津々である。これらをもとに、「大きなシャボン玉づくりをしよう」という学習問題を設定した。

第6時から、子どもたちどうしでアドバイスをしたり、教師のお手本を見たりしながら大きなシャボン玉づくりに挑戦した。この活動を通して、互いの工夫のよさやシャボン玉づくりのコツをつかんでいった。

第8時から、「もっと大きなシャボン玉をつくろう」を学習問題に、さらに大きなシャボン玉の作り方に挑戦させた。大きなストローの口を大きく広げている子、紙コップをストローに付けている子など、家から持ってきた道具を使って、自分だけの大きなシャボン玉を作る子供たちの姿が見られた。そして、「自分たちのシャボン玉を、幼稚園の子に見せたい」という願いを持たせた。

そこで、第11時は、E幼稚園の年長組の子供たちを招き、「シャボン玉ワールド」で園児とシャボン玉づくりをした。（研究授業公開）

子どもたちは、大きなストローの口を切り開いたり、モールで輪を作ったり、自分たちの工夫を園児に教えながらシャボン玉遊びをした。A子も、手を添えながらハンガーを園児に持たせ、シャボン玉のつくり方を教えていた。できた大きなシャボン玉を見て、はしゃぐ園児にA子も喜びを隠しきれない様子であった。

ここで、第12時の研究授業後の協議会の話し合いの記録を見ていきたい。<授業研究協議会の記録から>

<研究会の記録から>：市提出の論文より抜粋

- ・「大きいつくりたい」という願いを持たせたシャボン玉づくりが教材として大きく 貢献をしている。
- ・できたシャボン玉の作り方を嬉しそうに説明していた姿に、今回の発表までに友達と一生懸命、試行錯誤していただろうことを感じた。
- ・振り返りや発展の段階で発表会を行ったことで、児童も園児も学びを深めていた。
- ・幼稚園の児童との出会いに、喜びや活動の価値を感じさせたことが、子どもたち自信や自己肯定感につながっている。
- ・園児にとってもシャボン玉への願いを持たせながら遊びをするという点では、よい場となった。

- ・「大きいシャボン玉をつくりたい」という願いを持たせたシャボン玉づくりが教材として大きく貢献をしている。
- ・できたシャボン玉の作り方を嬉しそうに説明していた姿に、今回の交流までに、試行錯誤をしながら友達と一生懸命、学んできたことを感じた。
- ・振り返りや発展の段階で発表を行ったことで、児童も園児も学びを深めていた。
- ・幼稚園の児童との出会いに、喜びや活動の価値を感じさせたことが、子どもたちの自信につながっている。
- ・園児にとってもシャボン玉への願いを持たせながら遊びをするという点では、よい場となった。この記録からも、「大きいシャボン玉をつくりたい」という願いを達成するために、試行錯誤を繰り返すことで、シャボン玉づくりを自分のものにする児童の姿が見えてくる。また、幼稚園の交流を単元の振り返りとすることで、自分たちの学びを園児に示すことができた。この学習では、シャボン玉づくりという「むかしあそび」を通して「問題解決に喜びを感じる児童」に迫ることができたと言える。

<事例2>：保育園との交流を組み込んだ行事を生活科の学習に生かした例

小1生活科（国語・図工・道徳含む）「なかよしあきまつりをしよう」（研究主題：自己肯定感・自己有用感を高める学習の創造）

【自然体験行事】

学校行事：北っ子フェスティバル他 遠足：ハイウエイオアシス
社会見学：ぶどう狩り 学年行事：北っ子の森探検・いもほり
↓ (PTA主催行事：野鳥観察・親子キャンプ)

生活科・他教科合科+行事

- <つかむ>
秋の宝物と出会って季節を感じ、秋の宝物を
変身させて楽しむ
- ↓
- <深める>
秋の宝物を変身させ、「きたっこあきまつり」で
お客さんを楽しませる工夫をする。
- ↓
- <広げる>
「きたっこあきまつり」の体験をもとに、保
育園児を招待して「なかよしあきまつり」で
秋の楽しさを発信する。

本単元の「つかむ」段階では、アサガオの栽培・ブドウ狩り・サツマイモほりなどの体験をした。この活動は、秋を感じる体験となった。

さらに、学校にある北っ子の森での「秋みつけ」でドングリやくつつき虫（オナモミ）など、様々な木の実を集めた。子どもたちは、それを「秋の宝物」として大切にするようになった。そして、校庭の樹木の実を何度も取りに行くようになった。

「深める」段階では、「秋の宝物」で1年生の「きたっこあきま

つり」を開こうという願いを持たせ、おもちゃ作りをした。C男の班では、「松ぼっくり的あて」「葉っぱの魚つり」などを一生懸命つくった。

「広げる」段階では、1年生で「きたっこあきまつり」を開き、お互いにできたおもちゃの発表を行った。ここでは、自慢のおもちゃで楽しく遊ぶ子どもたちの姿が見られた。

そして、「北っ子フェスティバル（学校行事）」で、1年生は、「秋の宝物」で作ったおもちゃを発表した。班ごとにブースを設け、他学年や保育園児をお客さんとして招待した。ここでは、1年生が保育園児のお兄さん・お姉さんとなって一緒に遊ぶ姿があった。
「ここをひっぱるんだよ」「この線から投げるんだよ」と声かけをする子どもたちからは、成長を感じとることができた。

この実践では、園児や他学年に自分たちの学びを発信したことが、自己肯定感・自己有用感を高め、子どもたちの成長を促す役目を果たした。また、行事や生活科を通じて自然体験は、学びを深める基盤となった。これらの学習で得た学びは、今後の理科学習の大切な原体験となっていくと考える。

2.4. 考察

実践1から、シャボン玉遊びなどのむかしあそびは、子どもたちの意欲を喚起し、問題解決へと導く。さらに、単元の振り返りに幼稚園との交流の場を設定し、自分たちの学びも成果を伝えることで、自分たちの学びに達成感を感じさせることができる。このことは、学びを深め、空気の概念の原体験となっていくと考える。

実践2から、豊かな自然体験をもとにもものづくりや遊びを工夫させることで、子どもたちの学びを深めることができる。また、保育園との交流を組み込んだ行事を生活科の学習に生かし、園児や他学年に自分たちの学びを発信することで、子どもたちの成長を促すことができる。ここでの学びは、自然を学ぶ原体験となっていくと考える。

3. 研究のまとめと今後の課題

これまでの研究で、以下のことが明らかになった。

- ・生活科の「(5) 季節の変化と生活」「(6) 自然や物を使った遊び」の学習において、「むかしあそび」「自然体験」を生かし、教材を工夫することで、子どもたちの学びを深めることができる。
- ・保育と小学校の連携を進め、行事などを生活科の学びの場を広げることで、子どもたちの成長を促すことができる。

以上のことが、小学校以降の理科学習の基盤になる原体験をつませる手立ての一つになると考える。

しかし、現場で連携を進めるためには、以下のような課題がある。これらの課題を踏まえながらより有効な手立てを開発していきたい。

- ・保育と小学校の連携を生かした授業づくりは、まだ十分に行われているとは言い難い。地域の環境や文化を生かした教材の開発を進めたい。さらに、開発した教材や授業を蓄積していくことも必要である。
- ・忙しい現場では、情報交換の機会をつくることは容易ではない。保育と小学校の連携

を有効にするためには、そのための時間と場を確保していきたい。

引用文献

- 1) 文部科学省（2018）：小学校学習指導要領解説生活編 第3章 生活科の内容
第1節 内容構成の考え方：P26

**"Play in the old days", "nature experience activity", and
cooperation between preschool and elementary school in Japan.**

Yukiyasu KIMURA